

命ってすごい ―頭だけのカブトムシ―

小さな命が力つきてなくなった。一年たっても絶対忘れられない大きな命であった。

「うわあ、頭だけのカブトムシだあ。」

それはあまりにしょうげきなでき事だった。

昨年八月十五日、午後三時ごろ。佐世保市三川内みかわちの祖父の家に行き、みなでお墓参りに行っている時だった。あぜ道で黒い物が動いていた。アリの山だった。

「頭だけのカブトムシだあ。生きてるー。」弟がさげんだ。びっくりしてよく見ると、たしかに頭に足が四本ついただけのメスのカブトムシがたくさんのアリにたかられて必死でもがいていた。腹をさがしたが、もうアリに持っていかれたのか、見つからなくて、羽が一枚と後ろ足一本がそばにあっただけだった。(すごいな。これだけでよく生きてるなあ。)

私は、ともしんじられなかった。

「もうすぐ死ぬさ。お墓参りに行くぞ。」

と父が言った。しかたなく私もその場をはなれた。でもお参りをしているも、(あのカブトムシ、どうなったかなあ。もうアリにつれて行かれたかなあ。)と気になって仕方がなかった。

お墓の帰り道、私は一もくさんにあの場所に行った。いた、いた。やっぱり頭だけのカブト

ムシは、アリに連れていかれないように力いっぱい足を動かしていきこうしていた。

「このまましてたら、アリのえさになるったいね。せつかく生きとっけん、連れて帰ろうか。」と母が言った。

「うん。」

私はうれしくなった。こわごわ頭だけのカブトムシをつかんで、びっしりついていたアリを一匹残らず追い払い、袋に入れた。ここはどこだと言わんばかりに頭だけのカブトムシはあばれている。

「もう大丈夫だよ。」

と声をかけたが家に着くまでずっと袋の中でガサゴソ動いていた。

「頭だけで何で生きとっとなあ。」

と、歩きながら弟が言った。

「カブトムシは、きつと心ぞうが頭にあるとき。」

と姉が言った。(ふうん、なるほどねえ。)と私は思った。(めずらしいなあ。)と思った。

祖父の家に帰り、さっそくケースに入れてあげる。元気に動き回っている。ただ四本ついている足の右後ろ足だけは全く動かない。元氣すぎてひっくり返った。でも起き上がろうともがくが、自分では起き上がれない。このままにしていたら死んでしまうと私は恐くなって起こし

てあげた。

「お腹がすいとかもしれんね。」

私は綿に、さとうとはちみつと水をふくませて、その上に頭だけのカブトムシの口をくっつけて吸わせてみた。

「うわあ、吸いよる、吸いよる。」

弟がかん声を上げた。小さな口から口ひげを出して吸っているのだ。じっとして動かない。ひたすら吸い続けている。

「頭だけで生きてるだけでもすごいのに、みつもちゃあんと吸ってるってねえ。」

姉も大声で言った。

「そうだ。名前はカブちゃんがいいね。」

頭だけのカブトムシなので、上の方だけ取ってカブちゃんと私がつけた。みんなさん成した。でもカブちゃんは、そんなこと知らないようで、もう何十分も身動きしないで、ずっと吸い続けている。

夕方、カブちゃんは体せいを変えて、右前足を綿の下に入れ、綿をだきかかえるようにして吸っている。いっちゃ前でかっこいい。

夜になって、やっとガサゴソ動き出した。またあばれ出した。お腹はなくてもみつでお腹い

っぱいになって元気が出たのだろう。そのうちとうとうひっくり返った。元にもどしてあげようと私は右手でカブちゃんの頭をつかんだ。

「あいたたーっ。取ってー。」

いきなり私の右手人差し指につめを立てて、カブちゃんがつかんだ。体中に電流がビリビリーッと流れたようだった。痛くてたまらず、私は、大声を上げながら右手をふった。いくらふっても、カブちゃんはしがみついてはなさない。そばにいた弟たちも、オロオロするばかりで、どうすることもできない。あまりの痛さに泣きそうになった時、母がとんできて、わりばしで、カブちゃんを取ってくれた。

「すごい力だねえ。こんなに小さかのに。」

私は、カブちゃんに言った。この頭だけのカブちゃんのどこにこんな力があるのだろう。

しばらくしたらまた、カブちゃんは、ひっくり返った。今度は、みつのついた綿にしがみつかせて起こしてあげた。カブちゃんは元気いっぱいだった。カブトムシだったころのことを、ちゃんと知っていて、前に進もうとよたよたしながらも歩いている。そうしてひっくり返る。そのくり返しをずっとしていた。

夜おそく私は、ふとんに入った。電気を消してもガサゴソとずっと動いている。

「おやすみ、カブちゃん。」

と言った。

朝になった。起きてすぐカブちゃんを見た。

「よかったあ、元気だー。」

姉が、

「カブちゃんは一晩中ガサゴソしてねむれなかったよ。ひっくり返るたびに起こしてあげたんだから。」

と言いながら起きた。元気なカブちゃんを見てうれしそうだった。

朝ごはんを食べた後、前に進んでいるカブちゃんを見て、びっくりした。スッと右後ろ足がぬけた。もともと一本だけ動いていない足だった。

三本足になっても、カブちゃんは、元気いっぱい。うれしかった。そのうち歩くのをやめて、みつの綿の上ののって、私に向かって両前足を交互に大きく回しながら動かしている。踊っているようだ。

「♪何でだろう、何でだろうー。私がここにいるのは何でだろう♪」

と、横で見ていた父が、カブちゃんのまねをして歌った。みんな大笑いした。

でも、じっと私たちを見て、キツと頭を上げ、両前足をさかんに動かしているすがたは、堂々としていて、いげんがあった。

胴はなくても、全然おかしくないよ

とってもかっこいいよ、カブちゃん

何と言っても、こんなに力いっぱい生きてることがすごい

こんなに小さいのに、頭だけなのに、

見事な生命力だね

夕方になった。カブちゃんの様子が今までとちがう。右前足だけさかんに動かしている。なんだか苦しそうで、もがいているように見える。

「ねえ、どうしよう、どうしよう。」

私が言っても、みんな何も言えず、じいっとカブちゃんを見つめている。

カブちゃんの動きが、だんだんゆっくりになってきた。もう、ひっくり返る元気もないようだ。もう弱ってきたのか。このまま死んじやいやだ。私は急いではちみったっぷりの綿を持ってきて、カブちゃんの口に付けた。カブちゃんは、ゆっくりだったが、口ひげを出して、またみつを吸い始めた。しかし、こんなに、吸っても吸っても、カブちゃんは、うんこもしっこもしない。吸ったのは、どうなっているのだろう。

「もう、寝らんば。カブちゃんもがんばって生きよう、生きようとととさ。」

母がぼつんと言った。

小さな命の火が消えようとしている。でも消さないように、消さないようにカブちゃんは、

カの限り、がんばっている。すごいよカブちゃん。

朝五時。私は、とび起きて、すぐカブちゃんを見た。でも全然動かない。

「カブちゃん、カブちゃん。」

さけんでも、手でつついても、動かない。何だか固まったみたいだ。

「もう死んどるね。」

と父が言った。

「カブちゃんようがんばったね。」

と母が言った。涙が次から次に出てきた。止まらなかった。カブちゃんをなでてあげた。みんななでてあげた。

それから、みんなで大切にカブちゃんをかかえて、庭のマキの木の下にお墓を作って、大すきなみつといっしょに、カブちゃんをうめてあげた。

「頭だけで二日間もいきぬいて……。りっぱなカブトムシだったねえ。」

姉が言った。私は、涙を流しながら、うんうんとうなずいた。

後で姉と、頭だけでなぜカブちゃんが生きられたのか調べてみた。頭部だけとっていたのが胸部の上一節がついていたこと、人間とちがい体中にある九つの気門で呼吸をしていること、心ぞうが、背脈管はいみゃくかんという管状に長くなっている、カブちゃんにもそれがついていたこと、脳

は、神経節と言って、体節ごとにあり、足などはそれぞれに動くようになっていていることがわかった。それにしても、これまでただの昆虫と思っていたのに、すごい生命の仕組みである。

今でも目をつぶると、よたよたしながらも一生けん命歩き、私をじーっと見つめていたカブちゃんのすがたが目に見えよう。

体を切られても、命をあきらめないで

一生けん命に最後まで

生き続けたね、カブちゃん

どんなに小さくっても、

命ってすごいんだね、カブちゃん

だから

どんな命でも、

大切にしていけないといけないんだね

それを私に教えてくれたカブちゃん

私はカブちゃんの命の輝きを

絶対忘れないよ